Architect at Home

松野 勉・相澤久美 foo

2001年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

3階の松野・相澤宅。寝室階から相澤さんの仕事場と居間を見下ろす

私は千葉の漁村に生まれ育ちましたが、子供のころ、そのあたりの家はどこも開けっぴろげで、ちょっと出掛けるときに戸締まりする習慣はありませんでした。

そのころ、母親と一緒に出掛けた先で俄か雨に遭ったことがありました。「あ、洗濯物が…」と母が言うなり、ふたりして大慌てで帰宅してみると、開け放して出掛けたはずの縁側のガラス戸はピタリと閉まっており、庭の洗濯物もありません。不審に思いつつ家に入ると、洗濯物は取り込まれ、丁寧に畳まれて箪笥の前にキチンと置かれていました。あとで分かったことですが、これは、気をきかせた隣りの小母さんの仕業でした。またあるときは、人の気配がするので、ふと見ると、近所に住んでいるお婆さんが、合歓の木陰になる我が家の縁側に腰掛け、すっかりくつろいだ様子で煙草を吸っていました。そうそう、子供たちは子供たちで、お互いの家を行ったり来たりして、よそのお宅でご飯を食べたり、お風呂に入ったり、ときにはそのまま泊まっていったりしていました。漁村のことですから敷地境界がなんとなく曖昧で、家の造りも開放的だったので、気分的にそうなりやすかったのだと思います。

こんなことを思い出したのは、この頁の取材のために、fooと名付けられた、松野勉さん、相澤久美さんの「自宅」兼「設計事務所」兼「イヴェントスペース」兼「貸オフィス」を訪れ、おふたりから、シェアしている編集事務所のメンバーや、訪問客や、スタッフと一緒にする賑やかな食事の話、松野さんと相澤さんが外出しているとき、そうしたメンバーのうちの誰かが学校から帰ってきたお嬢さんの世話してくれるという話、自分たちが留守の間に友人たちが勝手に上がり込んでパーティが始まっていた話など、fooで営まれている日々の様子を聞いているときでした。つまり、私が子供のときに経験したことと似たようなことが、fooでは日常的に行われているらしいのです。

□

そのfooの写真と記事を本で見たとき、私は足元をすくわれたような気がしました。

足元をすくったのは、旗竿型の狭小敷地に建てられた住宅だから…ではありませんし、事務所に出入りするのに脚立を拡げた梯子で昇り降りするから…でもないし、もちろん天井高1.7mの動物の巣穴のような寝室だから…でもありません。強いて言えば、そのような使われ方をする建築を発想し、それを実現し、そこでの暮らしを実践している建築家のカップルがいるということでしょうか。本を眺めながら、私は「なるほどねえ」と、一応、納得したのですが、後になってみるとその納得の正体が何だったのかが、分からないのです。

今回のfoo訪問の裏には、そのモヤモヤした疑問の答えを見つけたいという気持がありました。

□

狭い旗竿敷地の奥に両側の建物に挟まれてギュッと押しつぶされたように見えるfooのファサードの白い外壁は、完成後6年を経た今はいい具合に薄汚れてきていて（失礼！）、気取らない家、気さくな家、という感じが前面に滲み出ていました。

そして、内部は鉄骨むき出しで、いっそう気取らないバラック的な魅力を醸し出していました。こういう「バラック好み」や一種の「無頼派的スタイル」は、松野さんの師匠、石山修武さんゆずりなのかも知れません。

両側の建物にギュッと挟まれたfooは、旗竿敷地の「竿」の部分にまで進出してきている

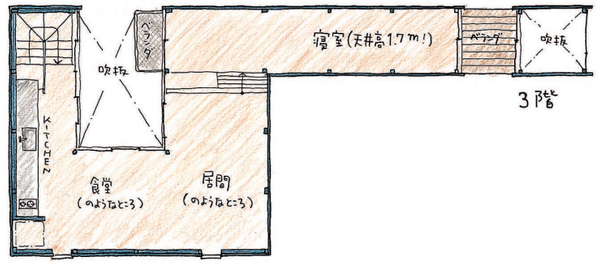
脚立で昇り降りしていたライフ+シェルター社（松野さんと相澤さんの設計事務所です）は、最近1階に引越したそうで、以前は多目的スペースと呼ばれていた場所が、新しい事務所になっていました。予算のない現場では工事中の建物の一部をとりあえず現場事務所にしておくということをしますが、なんとなくそういった雰囲気の漂う事務所でした。

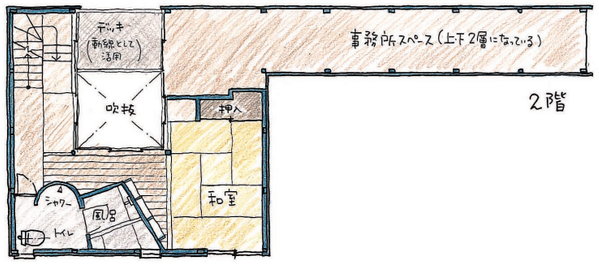
松野・相澤のおふたりから話を聞くうちに、私が直感的に感じた「気取らない家」、「気さくな家」、すなわち訪問者を拒絶するそぶりのないことが、じつは、この建物を有効に活用するための大切な条件であることが分かってきました。松野・相澤コンビは、この30坪足らずの旗竿敷地の中に建てた建物の中に、イヴェントスペースと、建築家、編集者、デザイナーが空間をシェアするオフィススペースと、自分たちの住まいを、「ごった煮」のように丸ごと放り込もうと目論んだのです。この建物が完成したときの挨拶文（「独立宣言」と呼びたくなる、声高らかな文章です！）はこうなっていました。

> わたしたちはここを、建築をベースとした様々なヒトや物事や情報が集散していく、都市生活のハブにしたいと考えています。日常的にビジネスが展開されながら、同時に情報の受信発信を繰り返す場所。そこで生まれるネットワークは、地域やコミュニティを制限しません。ワールドワイドに繋がっていきたいと考えています。

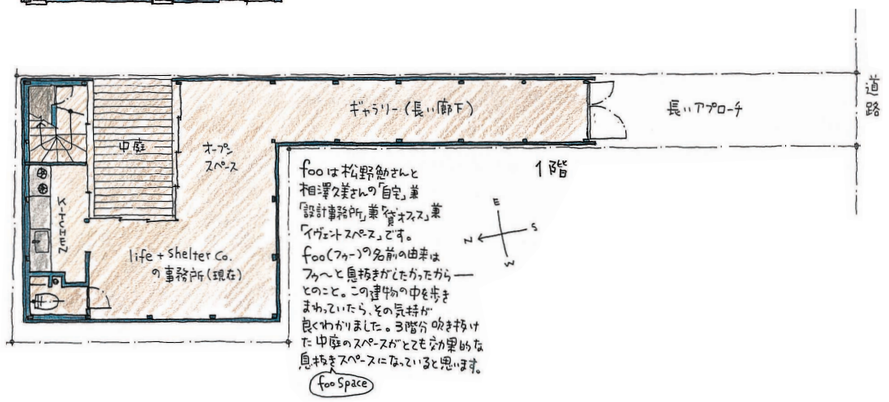
あっさり言ってしまえばこの建物は、ごった煮の「鍋」ということになります。その「鍋」に頻繁に出入りする人たちがそのたびに緊張したり気兼ねしたりするようでは成り立ちません。種々雑多な人たちが、自由に出入りできる雰囲気こそこの建物の真骨頂なのです。

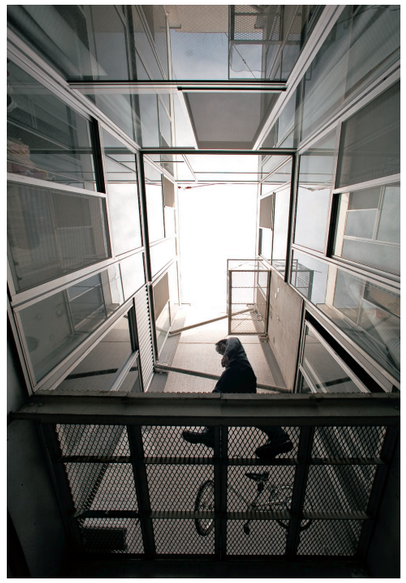
短時間で見学してまわり、話を聞いただけでも、計画当初の目論見は「宣言」どおり実現していると思えました。また、こ





編集プロダクションの仕事場になっているトンネル状の貸オフィス部分





この手すりのないデッキが、貸オフィスへの主要な動線になっていることが、図面からはまったく読み取れませんでした

右手がライフ+シェルター社。左手、廊下の奥の明るい部分が入口

の建物全体に「とりあえずこうしてある」という未完成の感じ、発展途上の感じが色濃く漂っていたことも、特筆しておきましょう。

□

3階にある、松野・相澤家の居間のようなところで雑談していると、ライフ+シェルター社のスタッフが上がってきて、お茶を淹れてくれました。スタッフは内弟子的とでもいいますか、住宅部分にも出入り自由らしいのです。その様子を見ていて「この家のプライヴァシーは、どうなっているんだろう？」と、ふと、気になりましたが、その私の気がかりをいち早く察知した相澤さんが、次のような説明をしてくれました。

「こういう家が成立するのは、そこの奥さんの性格次第かもしれませんね。私の家（うち）は父が演劇の仕事をしていて、戯曲を書いたりしていたものだから、劇団員がしょっちゅう出入りしていて、そんな人たちが家族同様に暮らしていました。そういう育ち方をしたので、私は他人が自分の家にいることが全〜然、気にならないんです…」。

まったく、間然するところのない説明でした。

ところで。さきほど私は、本で見て一応納得したけど、なぜ納得したのか分からない、と書きました。本に載っていた平面図は切手サイズだったのではっきり読み取りにくかったのですが、どう見ても多種多様な人々の領域の色分けと動線をどのように建築的に解決しているのかが、理解できないまま「これはこれで、成立していると思うことにしよう」と、そのときは納得したのだと思います。

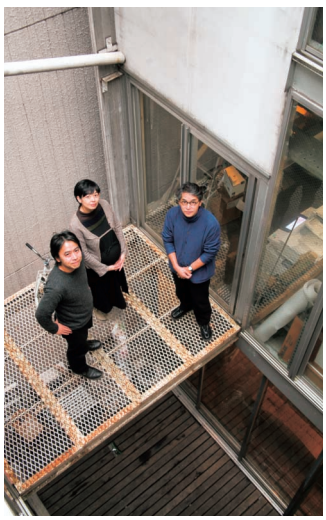
散らかりがちな台所はちょっと他人の眼に触れないようにしようとか、やはり洗面所は来客用と別にしておきたいとか、居間を通らずに浴室に行きたいとかいったたぐいのことを建築的に解決しようとすると、頭をひねり、プランもひねり回さなければならなくなりますが、そんなこと、まったく「気にしない！」とスッパリ割り切れば、なにも、アレコレ煩悶したりしなくてよいのです。足元をすくわれたのは、私が、いつもそうした生活者のこだわりを「気にしすぎ」て四苦八苦している建築家だったことに、あらためて気づかされたからかもしれません。結局、納得の正体は「こういう建築の考え方もアリなんだ」ということでした。

こう書くと、では、fooは建築的な解決をしていないのか？と早合点する読者がいるといけないので急いで付け加えますが、そうではありません。実際には、fooでは、中心にある中庭と吹き抜けが、そうした問題を大胆に、かつ、手ぎわよく解決していました。中庭と吹き抜けは、 この建物に出入りし、この建物を活用する人たちにとって「肺」のような役目をしていると書いたら、その建築的な意味合いを感覚的に理解してもらえると思います。

□

建物の内部を巡り歩き、3階の廊下に差しかかったとき、松野さんが前を歩いていた私の背中に話しかけるようにして「中村さん、この建物はいいですよ！」としみじみとした口調で言い、すぐに「自分で言うのも変だけど…」と付け加えました。本当は、松野さんは「こういう建築の真価を、中村さんはちゃんと評価できますか？」と質（ただ）したかったのかも知れません。

ここで、正直に白状しますが、もし実際にそう質されたとしても、私は、「yes！」とも「no！」とも言い切ることができず、曖昧に言葉を濁しただろうと思います。✱



左――松野・相澤宅の食堂と台所。天井には鉄骨のバッテン（ブレース）が「どうだ！」と言わんばかりにむき出しにされている
右――2階の高所平気症（？）のデッキで記念撮影。相澤さんはこの撮影の2週間後に次女を出産。おめでとうございます

なかむら・よしふみ――建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972〜74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976〜80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社　2000）、『意中の建築 上・下』（新潮社　2005）などの著作がある。